平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名（ふりがな：あだちくりつたけのつかしょうがっこう）	足立区立竹の塚小学校

校 長 名：横山 準一

所 在 地：東京都足立区竹の塚1の8の1

電話番号： 03-3884-5334

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	社会

≪研究主題≫

活用する力・発信する力の育成

～社会科における問題解決的な学習の一層の充実を通して～

【研究の要点】

○単元構造図に基づく指導計画の作成

指導計画の中に、単元構造図という項目を設定し、これをもとに授業者が単元ストーリーを描いた。

○小単元における4段階の学習過程

一つの小単元を「つかむ→調べる→まとめる」の3段階の学習過程を、「つかむ→調べる→考える→広める」の4段階の学習過程に設定しなおした。

○個人での思考を促す指導

発信する力を育成するため、自分と対話しやすい環境を作り、「考える」と「表す」が一体化した活動を設定した。

○集団での思考を促す指導

発信する力を育成するため、自分の考えを相手に伝え、相互に検証する時間を設定した。

○人に学ぶ教材の開発

児童が身近に感じる具体的な人が中核となる教材の開発を進めた。

○実社会につながる教財の開発

生活との結び付きの強い事象や地域で見ることができる事象などを具体的に教材化した。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

創立43年目，駅前の商業地域も学区域だが，学校の周辺は緑豊かな住宅地である。小林一茶ゆかりの炎天寺など，寺社史跡も多い。

平成20年度　足立区教育委員会研究奨励校（社会)、平成21・22年度足立区教育委員会研究推進校（社会）

学校選択制によって約４分の１の児童が学区域外から本校を選択している。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	2	2	2	2	2	3	0	13
児童数	74	49	80	72	73	82	0	430

教員数　28名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

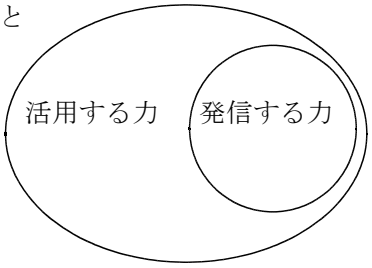
活用する力・発信する力の育成

～社会科における問題解決的な学習の一層の充実を通して～

(2) 研究主題設定の理由

今日，山積する社会的な課題に将来向き合うであろう児童に,社会的な見方や考え方をはぐくみ、明日の社会を変える力，持続可能な社会の在り方を考える力を養うことが重要であり，そのためには，学んだことを応用する力を伸ばすことが，本校児童の最大の課題であると考えた。

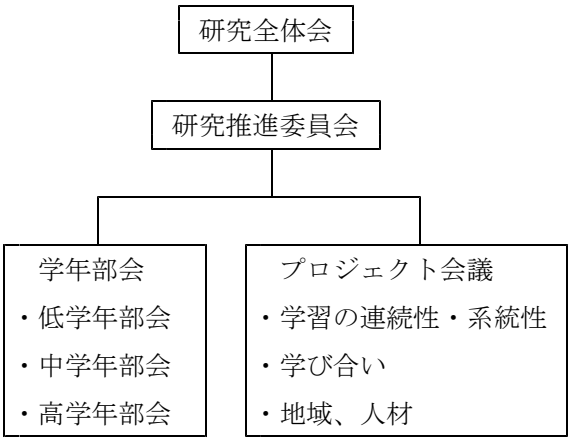
そこで，思考力・判断力・加えて社会科の教科特性としての資料活用の技能などを「活用する力」，また，社会的事象にかかわり，さらにその事象に参画しようとする力を「発信する力」とそれぞれ定義し，その育成を目指して研究主題を前期のように設定した。



さらに，平成21年度の実践を通して，社会科に

おいて「活用する力・発信する力」を育成するためには，問題解決的な学習の一層の充実を目指すことが核心に迫る方策であることが明らかになってきた。そこで，今年度になって，副主題を前記のように設定した。

(3) 取組体制



(4) ２年間の主な取組

平成21年度	４月～５月：指導計画・学習活動・教材開発の３つの視点からの研究組織の決定 ６月～１月：３年（消防）、４年（東京都の特色ある地域）、５年（高地の暮らし、情報）、６年（室町文化、政治）の授業を通して新教材の開発、指導法の改善を検証 ２月：年間指導計画、完成 ３月：研究紀要の発刊
平成22年度	４月：研究計画の見直し ６月～９月：３年（販売）、４年（ゴミ処理）、５年（工業生産）、６年（室町文化、政治）の授業研究を通して、新教材の開発、指導法の改善を検証。 10月～１月：研究発表会に向けた指導プランの作成と教材開発・準備 ２月：研究発表会、研究紀要の案内

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）研究の重点

研究の推進に当たり，社会科における下記の４つの力を育成を重視し，目指す児童像を設定した。

①学習問題を見出す力

「活用する力」を育成するために，一小単元一サイクルの問題解決的な学習を基本として，単元構造図を作成することにした。そこでは，どのように，学習問題を見出すかが重要であり，その点に着目した目指す児童像を，中学年では「身近な地域社会の中から問題を見つける児童」，高学年では「社会的事象の中から問題を見つける児童」と設定した。

②情報を処理する力

「活用する力」を育成するためには，問題を解決していく過程で，情報の収集・整理、情報の読み取り・解釈，情報の分析など，どのように情報を処理するかが重要である。そこで，この点に着目した目指す児童像を，中学年では，「資料から必要なことを選び出す児童」とした。そのうえで，本研究が目指す児童像を，「自分の考えをもって問題を追究する児童」と設定した。

③的確に伝え，理解する力

「発信する力」を育成するために、言葉で表現する機会をより多く設定した。そこでは、自分の思いや考えを的確に相手に伝えること、相手の思いや考えを的確に理解することが重要である。そこで、その点に着目した目指す児童像を、中学年では、「いろいろな方法で学び合う児童」、高学年では、「工夫して学び合う児童」と設定した。

④社会に参画しようとする力

「発信する力」を育成するためには，多様な社会的な見方や考え方に接し，様々な環境の中で体験を重ね，その中から自分の意思を決定したり，社会的事象にかかわり，その事象に働きかけようとしたりすることが重要である。そこで，その点に着目した目指す児童像を，中学年では，「地域社会への理解を深め、愛着をもって働きかける児童」と，設定した。そのうえで，高学年では本研究が目指す児童像「我が国や国際社会への理解と愛情を深め，よりよい社会を築いていこうとする児童」を設定した。

(2) 具体的な取組と考察

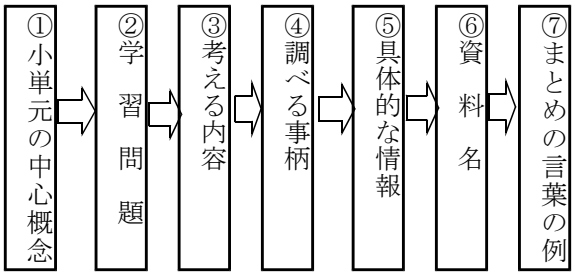
具体的な取り組みに当たり，３つのプロジェクトを立ち上げ，研究を深めていった。

①学習の連続性・系統性プロジェクト

新学習指導要領に示された内容について，具体的な学習過程・学習内容・学習活動を明示した一小単元一サイクルの指導計画を作成した。その際，次の２点を重視した。

ア．単元構造図を基にした単元ストーリーを描く

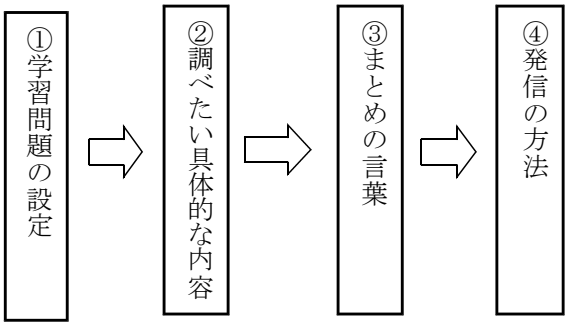
【単元構造図】



“中心概念”と“まとめの言葉の例”は同じ内容に設定した。そして，小単元の中心概念は学習指導要領の解説を根拠に設定を行った。まとめの言葉の例は学習問題の答えを表すようにした。

【単元ストーリー】

単元ストーリーとは小単元での期待する児童の意識の流れであり，児童の思考が小単元の中でどのように連続して展開するかを４つの観点から表すようにした。



イ．小単元における４段階の学習過程

研究を進める中で，つかむ→調べる→まとめるの３つの段階を，つかむ→調べる→考える→広めるの４段階に設定しなおした。自分の考えを吟味し，まとめの言葉で表現する段階を考える段階、それを発信する段階を広める段階とした。

ウ．実践例「いま、どんな自動車が求められているの」（５年）

学習問題設定の場面に関わる学習の充実を図るため，学習問題設定までの単元ストーリーをより具体的に描いた。以下に作成したものを示します。

単元ストーリー

学習問題を作ろう

❶日本が１位のグラフがあります。これはなんのグラフでしょう？

実は「自動車の生産台数」で日本は第１位(2008年)なんです。

「日本ってすごいな。」

❷みんなも将来車を運転する日が来るかもしれないね。みんなが将来ほしい車を選ぼう。

「見た目がカッコいい車。」「色と形がかわいらしい車。」「スピードが出そうな車。」

❸家の人や周りの人はどんな車をほしがっているかな？インタビューして聞いてみよう。

第２時

❶インタビューした結果、家族や周りの人はどんな車を求めているのかな？

「安全な車」「車内は広いけど小回りのきく車」「安くて、税金のかからない車」「壊れない車」

❷みんなや家の人がほしいと思う車はいろいろあって、みんなそれぞれ違うんだね。

❸では，昔の自動車と，今の自動車を比べて，なにか気付いた事はない？

「今のほうがカッコいい」「色がきれい」

❹では次に，内装を比べてみましょう。

「昔のハンドルは細くて頼りない。」

❺値段はどっちのほうが高いと思う？

「今のほうが高い。頑丈そうだし機能もたくさんありそうだから。」「今のほうが安い。技術がすすんで安く作れるようになったと思う。」

❻値段を提示。今の車のほうが安い。

❼自動車会社の人たちは，買う人の思いや願いにこたえながらも，今までより安く自動車を販売しています。自動車会社では，良い車を，どうやって安く生産しているのでしょうか？

「学習問題」

自動車会社では，人々の求めにあった自動車をどのように生産しているのでしょうか。

写真は学習問題を作成している場面です。

②学び合いプロジェクト

社会科の指導では，児童相互の学び合いを成立させるとともに，児童相互の評価活動を有効なものにすることが重要である。その際，次の２点を重視した。

ア．個人での思考を促す指導

自分の考えを練る時間の設定にあたって，学習問題に即して調べ考えるようにすること，適切な資料を収集できるようにすること，自分と対話しやすい環境をつくり，「考える」と「表す」が一体化した活動を設定することが大切であると考えた。

◇　実践例「室町時代に生まれた文化」（６年）

雪舟の水墨画（秋冬山水図）（山水長巻）や雪舟像、雪舟の個人年表を見て「おや」と思うところを書いたり，武士が雪舟の絵を好んだのはどうしてかを考えたりして，室町文化の特色に迫った。

写真は「秋冬山水図」を見て，気がつくことを考えている場面です。

イ．集団での思考を促す指導

発信する力を育成するには，互いの考えを伝え合い，相互に検証する時間が必要である。そこで，児童が中心となって学び合う活動を成立させることが重要だと考えた。自分の考えをより強く認識する，他の児童の考えを受け入れる，新しい考えを生み出すなど，学び合う活動が自分の考えを深めると考えた。

◇　実践例　「ごみのゆくえときまり」（４年）

新学習指導要領に示された「廃棄物の処理と自分たちの生活や産業との関わり」「これらの対策や事業は計画的、協力的に進められていること」の学習として，地域の社会生活を営む上で大切な法やきまりを取り上げて，授業を進めた。

学習問題をつかむ段階では，ごみの集積場所を見学・調査し，大量のごみが出されていること，ごみの出し方が決まっていることなどに気付いた。帰校した児童は，数時間後にはごみがなくなっていること，ごみにネットが被されていたこと，ごみの出し方には曜日や分別の仕方などのきまりがあることなどについて，一人一人が抱いた疑問をグループで話し合い，短冊に書いて出し合った。

写真は，短冊に書いた疑問を比べ，話し合い活動で，短冊を整理し，学習問題を作っている場面である。

「学習問題」

大量のごみをどこで，どのようにしまつするのだろう。なぜ，細かいきまりが決められているのだろう。

調べる段階では，ごみ収集車の観察や清掃事務所職員への取材，足立清掃工場の見学，東京湾中央防波堤の最終処分場の見学を行い，体験を言語化しながら，学び合いを重ねていった。

考える段階では，「混ぜればごみ，分ければ資源，収集した後の処理の仕方が違うから，無駄な作業が増えないように分別を守らないといけない。」「埋め立て地が一日でも長く使えるようにごみを減らす工夫をしなければならない。」等きまりを意識した話し合い活動を行うことができた。

広める段階では，パンフレットを作成し，身近な人々に，大量のごみがどのように処理されているのか，なぜ細かな決まりがあるのかを伝え，自分にできることを表明し，身近な人々に協力をうながす内容のパンフレットを作成した。

③地域・人材プロジェクト

社会科の指導では，様々な環境を活用し，体験的な学習活動を展開することが大切である。そこで，本校では，広く首都圏に人材を求める一方，児童が具体的に教材と向き合い，人間の働きや知恵に学ぶ教材の開発を進めた。

ア．人に学ぶ教材の開発

本校では，具体的な人が中核となる教材の開発を進めた。その場所やその時代に活躍する人の業績や知恵をクローズアップすることで，児童が、共感的にその人をとらえ，身近な存在と感じ，社会的な事象を理解して，それにかかわろうとする態度が生まれると考えたからである。

◇　実践例「縄文時代の人々のくらし」（６年）

導入の段階で奈良文化財研究所名誉所員・岡村道雄先生に来ていただき，話を聞いた。黒曜石を割り，そのかけらで野菜を切る体験を行った。「すごい，よく切れる」と驚きの声が上がっていた。

イ．実社会につながる教材の開発

本校では児童が学習内容を身近に感じることができるように，生活との結び付きの強い事象や地域で見ることのできる事象などを教材化するとともに新聞などの活用によって様々な社会的事象と児童の関心を結び付けることにした。

◇　実践例「買い物名人になろう」（３年）

新学習指導要領に示された「地域には生産や販売に関する仕事があり、それらは自分たちの生活を支えていること」の学習として、地域に新しく開店した「農家さんの直売所」をうたう商店を教材化した。

近くの大型スーパーで買い物をする家庭が多い中で，少なからぬ家庭が大型スーパーの近くに開店したこの商店でも買い物をしている。この事実からその秘密を調べていった児童は，この商店が，産地直送を売りとして，諸費者の需要に応えようとしている具体的な姿を発見していった。

写真は「農家さんの直売所」を取材している場面である。

大型スーパーの見学も行い，大型スーパーにも，「農家さんの直売所」にも，消費者のニーズを踏まえた工夫があること，消費者も様々な工夫をしていることを理解した。

３　研究の成果と課題

（１）研究の成果

①学習の連続性・系統性プロジェクト

・新学習指導要領に対応した，生活科・社会科の全単元の指導計画を作成することができた。

・教材構造図を基に，児童の言葉で思考の流れを表した単元ストーリーを描くことで，授業が組み立てやすくなった。

・一つの小単元を４段階の学習過程に設定することで，児童が主体的に追及する意識を持続することができた。

・児童に対して，平成21年４月と22年10月に、「社会科の授業がどの程度分かりますか」という意識調査に対して，「よく分かる・だいたい分かる」の割合が70％から75％に増加した。単元構造図に基づく指導計画を作成し，単元ストーリーを描くことで，児童に分かりやすい授業を展開できるようになったと考える。

・同じ意識調査で「社会科で勉強が分からないことや興味・関心をもったことについて，自分から調べようとしている」という問いに対して，「そうしている・少しそうしている」の割合が58％から64％に増加した。単元構造図を作成し，学習問題設定の場面に関わる学習の充実を図ったことで，主体的な学習が広がってきたものと考える。

②学び合いプロジェクト

・授業の冒頭の前時の振り返りの形ができあがったことで，本時の学習活動にスムーズに入れるようになった。

・話し合い活動を毎時間取り入れることで，他の教科でも話し合い活動が活発になり，意見をまとめることもできるようになった。また，自分の考えを発言する際，その根拠を示して発言できるようになってきた。

・資料を読み取る際，読み取る視点がはっきりとした発問なので，的確に資料を読み取れるようになった。

・平成21年４月と22年10月の意識調査で「自分の意見や考えを，相手に分かりやすく伝えることができるの問いに対して「よくあてはまる・少しあてはまる」の割合が57％から63％に増加した。学び合いの活動が他教科にも広がり，児童の自信が高まっていると考える。

③地域・人材プロジェクト

・身近な地域の教材化は児童にとって切実感を高めるのに効果的であり，学習問題をつかみやすいという効果もある。

・地域の人材を発見し，活用することで地域と学校の連携体制が強化され，児童の地域に対する愛着が増した。

・平成21年４月と22年10月の意識調査では，「自分や自分の地域の人たちの生活をよりよくしようと考えることができるよう社会科を勉強したい」との問いに「そう思う・少しそう思う」の割合が77％から85％に増加した。公民的な資質の基礎をより多くの児童が実感できるようになったと考える。

（２）今後の課題

①学習の連続性・系統性プロジェクト

・指導計画の作成に当たっては，地域や児童の実態を丁寧に把握することが必要である。

・広める段階での発信方法には各学年の発達段階を踏まえた方法を考えたが，さらなる工夫の余地がある。

②学び合いプロジェクト

・学習問題を設定する際，個人の課題を全員で共有するために，短冊やカードを用いたが，一つの学習問題にまとめる際には児童が戸惑うことがあり，まとめるための発問を工夫する必要がある。

・思考・判断の過程がより見えるような学習活動を一層工夫する必要がある。

③地域・人材プロジェクト

・ゲストティーチャーを迎える際は，打ち合わせの時間をしっかりと確保し，授業者の意図に沿った展開が行われるようにする必要がある。

・豊富に準備した資料の中から，より学習課題に迫ることのできる資料を児童に提示する工夫や教材の開発が必要である。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名	京都市立嵯峨小学校（ふりがな：きょうとしりつさがしょうがっこう）

校 長 名：牧嶋　徹

所 在 地：京都府京都市右京区嵯峨釈迦堂大門町 35

電話番号： 075-861-1543

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	社会

《研究主題》

自ら学び，自分と地域・自然・社会とのかかわりに気付き活かそうとする子
～よりよい社会をつくるため，考え，判断できる子どもの育成～

【研究の要点】

校区には豊かな自然と伝統ある文化，これらにかかわり支え続けてこられた地域の人々といった誇るべき素材がある。その素材を目標や児童の実態に照らし合わせて教材化することで，地域社会の一員としての自覚もうまれ，地域に対する愛情も深まる。未来を生きていく子どもたちには，今後よりよい社会をつくるために，学んだことをもとに考え，適切に判断できる力が重要である。それを培うことが，すなわち公民的資質の基礎を養うことにつながると考え，上記のテーマを設定した。研究指定校となった2年間，新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法に関する研究に取り組んできた。具体的には，地域素材を中心に，新学習指導要領の趣旨や目標・内容に照らし合わせ，さらには子どもたちの実態を踏まえながら教材化した。成果は，子どもたちの目の前にあっても気付くことがなかった社会的事象の意味を，社会科の学習を通して考えることで，社会的な見方や考え方が深まり地域社会の一員としての自覚を育むことにつながった。歴史学習をする際には,恵まれた環境を活かし，地域の方のご協力のもと，茶の湯体験や実際に嵯峨御流生花体験もさせていただくことができ，体験活動を通して具体的に学ぶことができた。今後は確かな評価の方法を工夫していく。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校の学区北部の北嵯峨は田畑が広がり，西部の嵐山は観光地，中部のＪＲ駅付近は商店街，東部は住宅地といった校区である。校区の中で様々な地域社会に生きる人たちの営みを見ることができる。また，嵯峨・嵐山・嵯峨野などの名所史跡の多くが本校区に位置しており，世界遺産もあり伝統文化財も多く，教材の宝庫である。これらのことから，社会科の研究を推進するのに大変恵まれた環境である。また，本校は社会科の研究を推進して今年度で５年目を迎えるので，これまでの研究を生かしながら，新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法の研究が深めることができた。

２　学校の概要（平成 22 年 4 月 5 日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	3	3	3	3	3	3	2	20
児童数	75	81	96	92	82	100	5	531

教員数　28 名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

自ら学び，自分と地域・自然・社会とのかかわりに気付き活かそうとする子
～よりよい社会をつくるため，考え，判断できる子どもの育成～

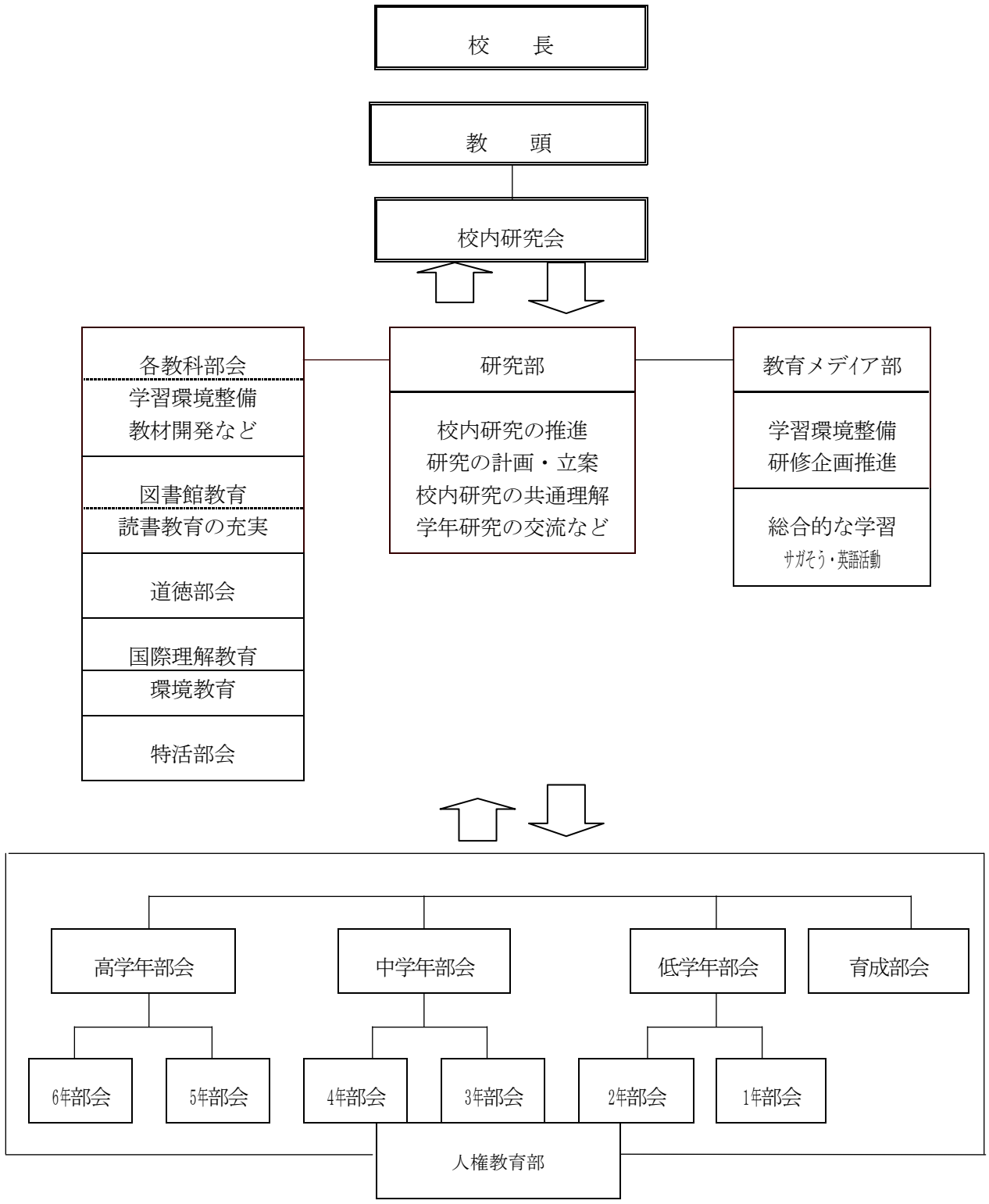
(2) 研究主題設定の理由

社会科の目標にも掲げられている「公民的資質の基礎」は，持続可能な社会など，よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を含むものである。そうした資質や能力を育てるためには，子どもたちが社会の事実・事象を丹念

に調べ，それらが社会の中で果たす役割や意味を考え，正しく判断できるようにすることが大切である。また，地域を起点とする社会の仕組みを具体的にとらえさせることが大切である。

そして，段階的に学習対象を広げながら，社会の中の様々な課題を自らの問題としてとらえ，解決していこうとする児童の育成こそが肝要であると考え，本テーマを設定した。

(3) 取組体制



(4) ２年間の主な取組

平成21年度	◇プレ近社研京都大会 全学年全学級公開授業 ◇教育課程研究指定校事業研究会 4年,6年公開授業 ◇第56回近畿小学校社会科教育研究協議会 全学年全学級授業公開 ◇社会科教育研究会・研究集会 4年，5年，6年公開授業
平成22年度	◇教育課程研究指定校事業研究会 4年「住みよいくらしをささえる」 ◇校内研究会 5年「わたしたちの国土と環境」 ◇研究発表会 3年「地いきや生活のうつりかわり」 4年「けいさつしょの仕事」 5年「わたしたちの国土と環境」 6年「長く続いた戦争とくらし」

２　研究内容及び具体的な研究活動

（１）　第４学年「海辺の自然を生かした天橋立」

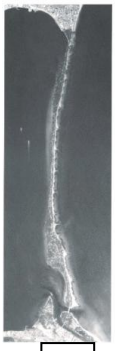
①　研究の重点

本単元は新学習指導要領の内容（６）のウをもとに摘成したものである。これまでは，「産業や地形条件から見て特色ある地域」であった内容が「自然環境，伝統や文化などの地域の資源を保護・活用している地域」へと改訂された。「自然環境，伝統や文化などの地域の資源の保護・活用」といった新しい観点が加わったことで，この内容のねらいは，地域の人々がお互いに協力し合いながら，地域を発展させようと努力している姿や様子を学ぶことにより，自分の住んでいる県（都，道，府）の特色を考え，誇りと愛情を育てることであろうと考えた。

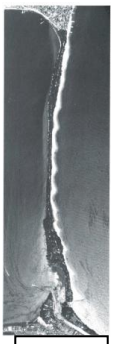
②　具体的な取組

［出会う］過程では，地図を活用して，天橋立と京都市との位置関係を調べ，天橋立の歴史にふれた。自然がつくり出した美しい景観は，［白砂青松］と呼ばれ，白い砂と美しい松が人々に愛されてきた。遥か昔から多くの人々から大事にされてきたことを知ることで，京都府にはすばらしい宝があることに気付いた子どもたちである。

［つかむ］過程では，近年，ダムなどの建設で流れ込む砂の量が減り，砂浜がどんどんやせ細り，このままでは天橋立が無くなってしまうという危機に直面することを知らせる。



昔



現在

生活様式が変わり，人々が松葉を拾わなくなったことが原因で，松の根が横に張らなくなり，台風で200本の松が倒れてしまったことも知らせる。こうした情報提供を通して，子どもたちに「このままでは自慢だった白砂青松の両方が無くなってしまう」という問題意識をもたせるようにした。

そこで，現在では美しい姿に戻っているという事実を提示し，そこから「誰がどのようにして自然を取り戻し守っているのだろうか」という学習問題を作り出した。

［調べる］過程では，天橋立を守る会の人たちや行政の人たちと電話やＦax などで直接聞き取りをしたり，地元の小学生向けに発行されている教材をもとに調べたりしながら，できるだけ具体的に追究活動を行った。

［まとめる］過程では，年々多くの人たちが環境美化に賛同し，清掃活動にも参加するようになり，美しさを取り戻した天橋立ではあるが，天橋立を守る会の会長さんは，10年前

から毎日毎朝，清掃活動をしている事実を知らせた。以前にはなかった新たな問題が出てきたからである。それは，ゴミの不法投棄である。多くのゴミ袋が海岸に打ち寄せられる。それを毎朝掃除している。この事実から，子どもたちは，天橋立を守るための活動は終わることがないことや，環境は人の手で取り戻すこともできるが人の手で簡単にこわすこともできてしまうことなどに気付くことができた。そして，遠い町のできごとではなく，自分たちも出しているゴミという身近な問題を通し，自分ごととして考えさせた。会長さんの願いは「天橋立を日本一美しい場所にすること。この美しい姿を未来に残したい」である。会長さんのこの願いにふれることで，単元の目標に迫ることができた。

③　考察及び成果と課題

京都府内にはあるが，子どもたちにとっては遠い存在である天橋立。子どもたちが天橋立と出会う場面では，教師自身が撮影してきた天橋立の映像を見せると，その美しさに感動の声があがった。昔から多くの人々から愛されてきたこと，日本三景の一つに数えられていることなどから，実際に行ったことのない子どもからも，「京都府にこんなすばらしいところがあるなんて知らなかったし，あってうれしいです。」という意見が出された。ここでは何もせずに美しい景観が保たれていると思っていた子どもたちであるが，実はそうではないことに驚き，「誰がどのようにして，天橋立の自然を取り戻し今も守っているのだろうか」という学習問題を作り出した。教師の手作り資料から，「行政」や「天橋立を守る会」やその他の様々な「活動団体」の存在を知った。そこでグループ毎に各団体がどのような活動をしているのかを調べていった。資料だけでは調べることができない状況も想定し，実際に聞いてみたいことがでてきたグループが電子メールやＦax で直接質問できるように予め各団体にお願いしておいた。そのため子どもたちは主体的に追究することができた。

子どもが学習の終末に書いた「天橋立を守る会」の会長さんにあてて書いた手紙を紹介する。

「私は天橋立の学習をしてすごいと思ったことがあります。一つ目は会長さんが朝４時半から阿蘇海の掃除をされていることです。二つ目はたくさんのボランティア活動が行われているということです。三つ目は天橋立は長い長い時間をかけて自然の力によってつくられたということです。私は学習した天橋立のことを他の人にも教えてあげたいと思います。なぜかというとみんなに教えてあげることで天橋立を守ることにつながると思うからです。私にとって天橋立を守る活動は日本や世界に誇れることです。会長さん，今まで私たちの宝の天橋立を守っていただいてありがとうございます。」

学習を通して，単元の目標に迫ることができたと考えることのできる記述内容である。

（２）第５学年「私たちの国土と環境」

～国土の地形の様子と人々のくらし～

①　研究の重点

本単元は，新学習指導要領の内容（１）のイをもとに摘成したものである。これまでは，「気候条件」に特色のある地域の学習であったのが，地形条件も含めて「自然条件」として捉えることになった。「自然条件から見て特色ある地域の人々の生活」を調べるとは，地形条件や気候条件から見て特色ある地域を取り上げ，自然環境に適応しながら生活している人々の工夫を具体的に調べることである。ここでは，地形条件に特色のある海津市を選び学習する

ことにした。

② 具体的な取組

［出会う］過程で，地形図や白地図作業からわが国の地形の特色を知った。南北に長く４つの島からできていることや，山が多く平地はわずかな面積しかないといったことに気付いた子どもたちは，地形によってくらしぶりは異なるのかといった疑問をもった。

［つかむ］過程で，まるで車が屋根の上を走っているように見える海津市の映像を用いた。映像を見た子どもたちからは「不思議だ。どうしてだろう」といった驚きの声が上がった。次に「どうしてこのような不思議なことが起こったのでしょうか」と問うと，「家の屋根ぐらいある高い道路が家の後ろにあるのだと思います」といった考えが出された。

そこで同じ道路を小学校の校庭から移した写真を提示した。すると校舎の２階ぐらいもの高さがある道路であることが分かった子どもたちは，いったい道路の向こう側は何があるのだろうと考え始めた。そして小学校の屋上から撮影した写真を見せた。

すると，道路の向こう側は川で，しかも校庭よりも川の方が高いことが分かった。これらのことから「海津市ってどのようなところなのだろう」と疑問に思い，海津市の土地の高さを白地図で調べ，海よりも低い低地であることに気付いた。次に嵯峨の町にはない排水機場の写真と水屋の写真を提示した。子どもたちからは次のような疑問が出てきた。

- 水との関係はどうなのだろうか。洪水は起こらないのだろか。
- 嵯峨にはない排水機場とはなにをするためのものなのだろう。
- どうして排水機場のある場所が固まっているのだろう。
- 水屋は何のためにある家なのか。
- 田が海津市の南側に多いのはなぜだろう。

これらの疑問について話し合い，学級の学習問題「海津市の人々は，どのような環境をつくりだし,くらしているのだろうか」をつくった。

［調べる］過程では，輪中にくらす人々が，どのようにして治水を進めてきて，水害を防いでいるのか，また水が豊富だということからどのように産業に水を生かしているのか等に着目して追究していった。その際には，海津市からいただいた観光パンフレットや海津市の小学校で使われている副読本等を活用した。子どもたちは，まず現在に至るまでの水とのたたかいの歴史や水害に対する工夫について知り，地形に合わせた生活がされてきたこと，現在も備えがされていることに気付いた。その備えがある上で，現在の産業が成立していることを理解していった。産業については，川を生かしたレジャーや新しい観光スポットづくり，平らな土地を生かした米づくり，野菜づくり等を追究する。特に野菜づくり

では，最先端のトマトづくりを中心資料とした。平らな土地と豊かな水を利用して，土を使わずトマト栽培ができることを知り，子どもたちはますます海津市のよさについて考えることができた。

［まとめる］過程では，海津市のよさを情報発信するためのアンテナショップを企画した。調べたことをもとに，海津市を知らない人によさをアピールするための企画を考えたのである。

3　研究の成果と課題

成果は，地域素材の教材化を図ったことで，子どもの問題意識が喚起でき主体的な学びにつながったことである。子どもたちは，自分の疑問を解決するために，何度でも地域に取材に行くことができるため，学習意欲も途切れることなく粘り強く学習を進めることができた。子どもたちが学習したことを保護者への紹介文として知らせたことで，保護者の方の地域に対する見方にも変容がみられた。学習でお世話になったゲストティチャーの方にも，学習して考えたことを手紙で知らせることもしてきた。手紙からも学習を通して子どもたちがどのように変容したかを見取ることができた。

また，校内授業研究会においても，新学習指導要領で変わる内容や内容の取扱いについての教材開発を進め，授業において取り上げてきた。今年度，５年生で新しく加わる６大陸３海洋を取り上げ，地図帳や地球儀の活用の仕方などについて提案することができた。この単元は，来年度から京都市の第５学年の子どもたちが社会科において最初に学習する単元である。どのような内容で第５学年の社会科の学習がスタートするのかを提案することができた。11月 26 日に行った研究発表会では，第３学年から第６学年までの内容について，昨年度の研究を活かしさらに検討を重ねてきた授業を通して情報発信することができたと考える。昨年度開発して行った「海辺の自然を生かす天橋立」であるが，今年度もさらに検討を加え実践した。

課題は，自分自身で学習問題を設定するための力を子どもに育てたいと考えて研究を進めてきたが，全ての子どもたちにそうした力がついたかどうかを評価をより確かに評価する方が十分ではなかった点である。評価場面と評価規準の焦点化，評価方法の明確化などを含めて，子どもたちの学習状況をどのように評価していくのかということについて，今後，研究していく必要がある。